

ハワイから来た植物が 大阪で息づき、花を咲かせている。 もっとたくさんの人々に、 観てもらいたいと願いながら…。

温暖な気候と青い海、波の音にウクレレの音色が心地良く響く…。ハワイにはそうしたイメージがすっかり定着しています。そんななかハワイの自然、とくに植物の魅力をもっと多くの人々に知ってもらおうと活動しているのが裕子(cambra)さん。特集ページでご紹介した「ハワイフラワーツアー」のガイドにボランティアで取り組んでいます。「植物は人間の気持ちをしっかりと感じ取り、喜んだり悲しんだりしています」と話す裕子さんに、ハワイの植物と咲くやこの花館を満喫するヒントを伺いました。

—ハワイフラワーツアーのガイドをはじめたきっかけは？

裕子 最初に「咲くやこの花館」を訪れたのは1990年、花博(国際花と緑の博覧会)の時でした。たいへんな賑わいぶり、ハワイから連れてこられた花々もキラキラ輝いていたのを覚えています。

—半年の間に、約2400万人もの人々が押し寄せました。

しい。植物は言葉を使わないから、私たちが伝えてあげない…。

—植物は人間の会話に耳を澄まして、と聞いたことがあります。

裕子 植物は人間の感情を感じるとし、愛情を注ぐとキレイに咲くというのも本当です。見つめられると喜ぶし、逆に見られていないと悲しみがにじみ出ます。咲くやこの花館では8年前から「ハワイ花と文化展」を開催していて、私はその運営にも協力しています。毎回ハワイにまつわる植物にスポットを当てて紹介しているんですが、いつも私たちが選んだ植物が見事な花を咲かせるんです。今回は「タコノキ」でしたが、毎年2つほどしか咲かないのに、なんと7つも咲きました。私たちの会話を聴いて「よっしゃ、パアッと咲いてやるかー」とハリキッテくれたんですよ。

—私たち、というのは…
裕子 こんなにたくさんの方

裕子 ところが数年後に訪れると、当時の熱気はどこへやら。このままではせっかく咲いている花も、満足に見られないまま枯れてしまふ。ハワイから来た植物も同様です。そこで私は「咲くやこの花館にハワイの植物がある」「こんなに面白い！」と伝えられれば少しでも植物と文化を紹介する植物園本来の役割を發揮できるのではないかと考え、そこで私からハワイフラ

ワーツアーを持ちかけたんです。

—ハワイの植物と言えば、派手な色のハイビスカスを思い浮かべますが…。

裕子 多くの方がそう思っています。カラフルな色遣いなのは園芸種として作られたもの。それがダメとは言いませんが、せめてウクレレやフラをする人、ハワイが好きという方には真実を知ってほ

ワイの植物が、しかもこれほど現地に近い状態で展示されている場所は、日本でも咲くやこの花館だけ。神戸、名古屋、東京から仲間がボランティアで駆けつけ、ウクレレやフラ、歌などでイベントを盛り上げているんです。

—根本にあるのは、やはり植物への愛情ですか？

裕子 ウクレレや歌は、来場者の方はもちろん、植物にも聴かせています。植物への愛は一方通行。でも、突き詰めれば家族や恋人への愛も同じです。ギブ、ギブ、ギブ…。与えるばかりの「無償の愛」です。

—無償の愛。うーん、難しいですね。

裕子 例えば子どもが「この花、キレイだなあ」と口にする、その瞬間の思いが無償の愛。この花が欲しいとか、売って儲けたいとか、実がついたら食べたいなどは一切考えていません。咲くやこの花館に

来て草花を眺め、香りを楽しみながらゆったりと過ごしていると、自然と子どもも心に近づけます。ですからココへ遊びに来る時は、ぜひたっぷり時間をとってきて欲しい。スケッチをするのもいいし、俳句をひねるのもいいでしょう。そうして咲くやこの花館の持つ本当の魅力に気づき、友人や知人に伝えてもらえれば、着実に来館者

が増えていく。訪れた皆さんも、私たちも、そして植物たちも、みんながハッピーになれるんです。

Special Interview

スペシャルインタビュー



裕子 cambra さん

ゆうこ かんぶら

日本生まれ。タンカーの船乗りだった父親の影響で、海外に目を向けるようになる。若い頃、風習を知らないままハワイへ遊びに行った時、現地のお年寄りから「ハワイアンキルトの使い方が違う」と怒られ、それがきっかけでハワイ文化の奥深さに関心を抱き、ハワイを愛するようになる。現在はハワイと日本に半分ずつ滞在し、カウアイ島の植物園(リマフリガーデン)でもボランティアでガイドを務める。ちなみにビーチサンダル愛好家で、真冬以外は素足で過ごす。ニックネームは、ハワイでは「ヒナ(タコノキの花)ちゃん」、日本では「親方」。

2012年12月8日 咲くやこの花館にて